

「関西学院スポーツ史話 上ヶ原篇」

通史 神戸原田の森から上ヶ原へ 関学スポーツ125年の歩み

神戸・原田の森で40年、上ヶ原で85年、わが関西学院は明治・大正・昭和・平成の4代にわたって茫々125年の歴史を編んできた。その中には関学スポーツの生々発展の跡が当然のごとくに含まれており、それは多くの面において学院の進展と軌を一にしてきた。いまここに「関学スポーツ125年の歩み」をつづる。過去を振り返りつつ、さらに継続される学院の未来図が光輝に満ちたものであれかしと願うものである。

(米田 満)

※関西学院大学定年退職記念「関西学院とともに」 1996年4月1日発行

明治期

関西学院の創業は1889(明治22)年である。最初の構成員はランバス院長ほか3人の教師と神学部8人、普通部(のちの中学部)19人だけ。神戸の東郊、原田の森でささやかな村塾としてのスタートであった。

開校後10年経っても全校で100人足らずの学生・生徒である。現在のような運動部の組織がありようはずはなかった。しかし何と云っても若者ばかりの世界、そこに何か素朴な形の身体運動が行われていたことは当然考えられる。創業数年のうちには野球のボール投げが始まり、フットボールが蹴られていたようだ。94年には和歌山中学の古いボートを譲り受けて「みるめ」と命名し、敏馬(みぬめ)浜に浮かべて寮生がさかんに漕ぎまわった。

97年ごろから野球がかなりポピュラーになってきて、神戸の町における学校チームとしての先鞭をつけた。当時のスタイルは捕手が撃剣用の面をかぶり、グラブを手にするほかはすべて素手で、袴を短くはき、脚絆、わらじがけといういでたちである。バットも数が少なかったので、ボートの古いオールをけずって代用にしたりした。

投手の畑歎三が外国人に教わったカーブを神戸球界で初めて実戦に用い、相手をキリキリ舞いさせたのも初期の語り草なら、この曲球使用に対して「曲ったボールを投げるとは卑怯千万」と、のちに何度も大臣の要職についた永井柳太郎が大演説をぶったのもこのころ。1901年には朝早く学院を発ち、六甲越えで西国街道から京都まで歩き通して、当時レベルの高かった同志社と対戦したりしたが、翌02年に初めて三高主催の近県連合大会に出場して中央球界にその名を知られた。

02年ごろには軟式テニスが始まっている。当時の南寮の横にコートを作ったが、最初はラインの代わりに細木やワラ縄を地面に埋めこみ、それを針金で押さえてあるという代物、ネットも太い紐に数本のナワをぶらさげて代用した。

06年になると、日露戦争帰りの中村賢二郎が寮専任舎監兼体操教師として復校し、その尽力で院友会の名のもとに雑誌部、陸上運動部(野球・庭球・蹴球)、端艇部の組

織が作られた。このうち蹴球部は名のみ終わったが、野球・庭球・端艇の三部は次第に対抗試合を重ねていった。野球部は連年、三高大会を最高目標にして次第にレベルを高めていったが、明治末年には神戸球界の覇者といわれるまでに成長していったし、庭球部も大毎の浜寺大会や、三高主催・関西中等大会のトップクラスに飛躍している。また端艇部は07年初頭に教職員、生徒、父兄、総ぐるみの募金運動によって「あさひ」「みかづき」の新艇2隻を作ってからめきめきと腕を上げ、11年には当時の最高権威であった琵琶湖の武徳会主催全国中等大会に出場し、初陣ながら名誉競漕に選ばれるという殊勲をたてた。

柔道、剣道は1897年ごろから同好、有志の者が少人数でやり始めていたが、1908年に撃剣部、09年に柔道部が正式に院友会の中にできて、それ以後、本格化していく。

さて、創業以来、約20年間の関西学院普通部は正式な中等学校令によらず、各種学校としての認可にとどまっていたし、神学部も設立黙許という取扱いであった。そのため、普通部は上級学校への進学資格を与えられず、また関学生の手立ては在学中、徴兵猶予の特典もなかった。これらが1910年前後から次第に改善されていく。

08年、神学部は専門学校令による文部大臣の認可を得、翌09年、普通部も中等学校令による認定を得た。また、つづく10年、学院創業以来の経営主体であった米・南メソジスト教会にカナダ・メソジスト教会が加わって合同経営の議が確定した。この認定問題と合同経営のことは関西学院史の決定的な事項である。それ以後、校地の拡大、校舎・諸設備の拡充、学生・生徒数の増加と、大正期に移って関西学院は一路、飛躍発展の途を歩むこととなってゆく。

大正期

創立以来の懸案であった高等学部(商科、文科)は1912年3月に創設され、その6月、関西学院専門学生会が発会した。その第3部として武芸会、庭球会、野球会、端艇会の4部門が設けられたのが組織的な運動部の最初のものである。

揺籃時代の運動部にあつて対外的に武名を高めた最初のもは相撲部であった。13年、須磨で開かれた第1回県下大会に主将竹野宗治がみごと優勝、以後も数年、団体・個人に連戦連勝の勢いをみせた。竹野主将は六尺豊かな巨漢で、つねに大鉄棒を引っさげて歩いていたという学院の名物男、人称して「当代の雷電為右衛門」と謳った。端艇部もまた揺籃期の華と讃えられ、野球部も池田多助教授の努力で次第に部の体裁を整え、15年、来朝中のシカゴ大を学院グラウンドに迎えて善戦し、その実力、早慶に伯仲すと認められた。

初期の運動家の中には野球もやればボートも漕ぐといった人士が沢山いた。何しろ大正期、最初の数年はまだ学生数も少なく、それでいていろいろな運動部がつぎつぎと誕生していった。15年に入学した青木真は野球、蹴球、テニス、ラグビー、ピンポンをする。それにボートも漕ぐという、実にオールラウンドの活躍ぶりであった。青木ほどでなく

とも、2つや3つのスポーツをかけ持ちするのは朝メシ前といった運動家がいくらもいた。それが大正初期のスポーツのひとつの姿であった。これが次第に独立した運動部組織に集約されていくのが、次の時代の動きということになる。

17年、学院は積極的な拡張計画を実現に移し、かつ大学昇格問題が真剣な関心事となり、21年には高等商業学部の独立をみた。学生数の急増とともに運動部各部の成長にも刮目すべきものがあった。この時期に全国的な令名を馳せたのは庭球、陸上競技、野球、弓道の諸部であった。

庭球部を支える背骨は20年、畑歎三教授が選定された“Noble Stubbornness”であり、この精神を体して同年秋の硬式採用から日ならずして覇を全日本に唱えるに至った。初期の名選手中、とくに光彩を放ったのは複の吉田・小林組であり、21年秋の全日本複に優勝した。チームとしては21年10月、当時日本一を豪語する慶大を大接戦のすえ降して全日本に君臨したほか、22年6月には来朝中のカルフォルニア大が関東の諸大学を席卷して意気揚々と西下したのを鳴尾に迎えてこれを撃破、わが国庭球界のため万丈の気を吐いた。吉田・小林組に端を発する複の伝統は24年4月、渡辺・神田組が全日本のタイトルを獲得、つづいて佐藤・秋元組は24年秋から26年まで関西学生の複に3連覇、27、28年の上原・神代組の優勝と伝統を守った。

19年5月、陸上競技部はマニラの極東五輪に伊達宗敏を送り、翌20年5月東都の覇者、早大を鳴尾に迎えた第1回定期戦において63－45という大差で勝って全日本君臨の大願を果たした。短距離の伊達、障害の渡辺文吉がその中心。渡辺は高障害・低障害の日本記録を作り、21年、上海の極東大会にも参加して障害2種目に2位となった。23年の極東大会(大阪)には十種の渡部武寿と棒高跳の中沢米太郎(優勝)が参加。秋の関西インカレにも問題なく優勝したが、ハンマーの寺田辰次郎は独創になるトリプル・ターンを完成して24、25年の神宮大会に連覇した。

弓道部また、この時期に光彩陸離たる活躍をみせ、25年に剣持、佐藤、小山ら一騎当千の士をすぐって東都遠征。早慶をはじめ、高師、一高ら群敵をなぎ倒して堂々日本第一の金的を射止めたほか、秋の京都武徳会における近畿連合にも3年間6回連勝という金字塔を樹立し最高の優勝弓を授与された。

野球部は20年に山口、岡田、島津ら超弩級をそろえて第1期黄金時代を迎え、6月には来朝中のシカゴ大と4－6の大接戦を演じ、また当時、日本球界の覇者といわれた早大にも互角の戦いを挑んで学院強しといわれた。20年は中学部も朝日新聞社の全国大会に勝ち、学院野球部の全盛期であった。

しかし、翌21年の満鮮遠征中に“京城事件”として伝えられる不祥事をひき起こした。以後不遇な一時期を招いたが、24年、松田捨吉(学院一早大)を専任監督に招いて精進した効あって、25年の全国高専大会に堂々優勝、黄金時代を再現した。

草創期に武名を揚げた相撲部は21年の関西学生に団体・個人(大守謙)を制して再び台頭、27年にも関西大会に優勝、全国大会は優勝戦で惜敗した。また学院最初の

国際オリンピック選手、石田恒信(24年・パリ)を擁した水上競技部は25年の高専大会、関西学生に勝って全関西のトップに立ち、蹴球部も24年に始まった早関定期戦の相次ぐ死闘で実力を増し、27年初めて早大に完勝、28年には上海に遠征した。

剣道部は25年の台湾遠征のころから躍進をみせ始め、昭27年秋の神宮大会には松本敏夫が日本第一の優勝額を神殿高く掲げた。一方、新進の籃球部(のちのバスケットボール部)は26年、早くも関西を制し、27、28年と王座を譲らず、同じく卓球部は名手倉橋長七を得て躍進を始め、28年の関西学生、および全国高専大会の団体・個人(倉橋)の覇権を取った。

運動部好況のうちに、21年ごろに作られた「狭霧晴れゆく暁の……」という運動部部歌が声高らかに歌われた。この時期、多くの運動部の確たる目標となったのは、神戸高商(のちに神戸商大―神戸大学)との定期戦であり、春秋の野球、庭球、陸上競技をはじめ、ほとんど各種目に激しく相競った。試合を前にして校庭に狼火を焚いて若人の熱のほとばしるままに氣勢をあげ、前日にはチャペルにおける激励会が慣例であった。各部とも他の試合はいざ知らず、この定期戦だけはと^{まなじ}蹴を決したし、全学あげて試合当日の興奮たるや凄まじいものがあった。この時期に学院生活を送った全学生にとっては忘れえぬ青春の一コマであり、運動部自体にとっても好敵手、神戸高商との角逐、異常なまでの勝利意欲は相つぐ躍進を生む一因ともなった。

前記、運動部部歌の一節に「……八百の友君を守る……」とあるが、大正末(1926)年には学生数は800人をキープするようになり、それに中学部の約1000人名が加わった。さしも2万7千坪の学院校地も狭溢となっていた。ここ数年の間に、学院周辺に張りめぐらされた阪急・阪神・省線(現 JR)それに神戸市電といった交通機関の便はおどろくべき進捗ぶりであった。学院の南、敏馬の浜にすぐ隣りする神戸製鋼所などの煙突から吐き出される煙害のために、原田の森の由緒ある松の古木が次第に枯死していく状態を目にするような時代であった。

24(大正12)年、神戸市東郊、西灘村は人口3万4千を擁して「市」か「村」かといわれる、日本一の村であった。その急激な発展のため、学院周辺は繁華の町となり、昔の“原田村塾”の姿はどこへやら、教育上、好ましくない地域と化していた。これに、19年以降、長きにわたって腐心されてきた大学昇格の願望、そのための校地をどこに求め、基金を如何に手当するのか。学院移転の大問題は首脳の間でつとに考えられてきたようであったが、25年には西宮・上ヶ原の土地のことが具体的な課題として浮び上がっていた。

かくして29年3月、学院は創業の地、原田の森から西宮・上ヶ原へと移転した。たまたま創立40周年のこの年、学院は新天地への移転とともに、さらに新しき段階を迎え、以後50周年にあたる39年までの10年間は予科、大学の開設を機として学院の充実期と呼ぶことができる。

昭和期(その1)

庭球部の偉業は上ヶ原に移ってさらにつづいた。1929(昭和4)年夏の第1回全日本学生選手権に名手上原増雄が堂々優勝、複も上原・神代組は関西のランク1位、全国4位と伝統を示したが、さらに32年、堀越・鶴原組は大毎、全日本、関西の各選手権を連取した。大正末年に学窓を去った先輩の佐藤俵太郎は連年その実力を増して29年、全日本 S2位となり、30、31年のデ杯選手として依然たる妙技をみせた。この時期に活躍した各選手は卒業後も各選手権に姿をみせ、現役、OB 一体となって関西の王座を独占しつづけた。

蹴球部も原田時代を上回る黄金時代を迎え、再三にわたって全国の覇を掌中にした。29年は後藤靱(←●異体字●)雄を主将とし、壇野、堺井、門脇、斎藤と名手を揃え、10月の神宮大会決勝で法政を3-0で破って堂々たる全国制覇をとげた。

相撲部の全国制覇は31年秋、堺大浜の第3回全国大会で達成された。決勝は明大に対して4-1の星、以後も関西の常勝軍として第3期黄金時代を実現させた。この時代の大將、木村正春は学生界随一の強剛として満州、ハワイに遠征し、つねに最高の成績を収めて学院相撲部の至宝と謳われた。

卓球部は名手倉橋を送ったあとも関西の覇はもとより、全国高専大会に連年王位を譲らなかったが、34年はあらゆる試合に連戦連勝、第2次黄金時代を築いた。越えて36年の全日本では渡辺重五が当代随一といわれた早大の今選手を降して学院に全国の覇を持ち帰った。また久しい雌伏を経た柔道部は“寝業の関学”として次第に実力を高め、35年の第22回高専大会でついに全国制覇の悲願をとげ、過去20数年、官立高校に独占された覇権をわがものとした。引きつづき38、39年の全国大会に圧勝連覇したのは大きな殊勲であった。水上競技部は31年、宿願の全国高専大会制覇、36年まで関西インカレ8連覇という快記録を残した。

一方、関西で依然常勝を誇る弓道部は、33年の神宮大会に辻谷善逸が全国の名射手を抜いて見事優勝、奉納額を掲げ、また、籃球部は34年秋のリーグに宿敵京大を降して6年ぶりに覇権を得、第2期黄金時代を築いた。越えて35年、再び関西の首位を占め、学生王座戦は東大と対したが、1勝1敗のあと、決勝は10-11の1点差で恨みをのんだ。

また新しく誕生した拳闘部、軟式庭球部、排球部、ラグビー部などが順調に活動し始めた。

39年9月28日、創立50周年記念日を迎えた学院は、上ヶ原転移以後10年の充実を喜び、天父の恩寵を感謝した。しかし、37年支那事変突入以来、太平洋をはさんで風雲急を上げる日米の関係は刻一刻と緊張の度を強め、国民生活の各般にわたっていわゆる新体制への転換が強要されるようになっていった。学院運動部の歩みももとより例外であるはずはない。40年、文部省令により学生会は報国団に改組、運動部は鍛錬部と改称した。そして国家目的という至上命令のもと、純粋にスポーツを愛する立場は

次第に抑圧される形となっていた。同年、ベーツ院長はじめ外国人教授の帰国が相つぎ、翌41年は修業年限の短縮、卒業期繰上げと戦時の非常措置が相つぎと学院生活をゆさぶった。しかし国を挙げて、動乱の渦中にあったこの時期に、なお学院運動部の示した敢闘譜は絶賛に値するものがあった。

40年、卓球部の崔根垣、西山恵之助は汎太平洋大会に出場して崔が輝く個人選手権を獲得、同年暮の全日本学生でも崔・西山組が複に優勝、41、42の両年にも全日本学生選手権を学院にもたらして日本卓球界をリードした。相撲部は村上、井口、泉らが活躍した時代で、40年、全国大会に優勝して変らぬ伝統を誇った。また排球部は40、41年に全日本を制し、籠球部は40年の神宮大会制覇を機として早関定期戦4連覇という快調を示した。スキー、馬術、軟式庭球、水上競技、ヨット、山岳ら各部の活躍の跡も実にすばらしく、いずれもこの時期の関西の覇権を独占して、動乱期になお学院運動部の盛名を高からしめた。

太平洋戦争突入から2年目の43年3月、文部省では戦時下学徒教育の重点種目案を発表し、戦技、武道を除く多くのスポーツ、とくにその発祥が英米などの敵国にかかるものは非重点種目として廃止を強要、同年7月には多くの部が解散を余儀なくされた。このころ戦局はますます苛烈を極め、国を挙げて戦争一本ヤリに臨まざるを得なかった灰色の日本からは事実上、スポーツそのものが姿を消し、それまでペンを握り、ボールにいい知れぬ愛情を抱いたスポーツマンが学徒動員の人命によって危胎にひんする軍隊へと駆り立てられていった。

それから流れた2年の星霜は日本にとって果てしない暗黒の時代であった。

そして時代は一変して戦後の復活期へと移行する。

昭和期(その2)

敗戦とともに日本には再び平和が蘇ってきた。しかし、未曾有の混乱に打ちひしがれた日本人は、物心両面になおしばらくは受難の時期を甘受し、神の審判を恐れねばならなかった。再建平和日本という旗印が戦後の進むべき道を示しはしたが、何を拠り所とし、いかなる光明を頼りとすべきか、暗中模索の混沌たる日本がそこにあった。その虚脱状態の日本に奇蹟的な生気を注入したもの、それはフジヤマのトビウオ・古橋の偉業に端を発する戦後スポーツの若々しい息吹きであった。スポーツの意義がこの時ほど光彩を放ったことはその類を見ないとさえ言って過言ではあるまい。復活後、いち早く全日本に君臨した学院スポーツの歴史的意義もそこに認めることができよう。

終戦後、各運動部はそれぞれに復活を急ぎ驚くべき活動の範囲を示し始めた。そして50年を頂点とする戦後の偉業は、学院運動部全体として赫々たる黄金時代を謳歌することとなった。48年の全国制覇4部に端を発し、49年は7部、50年には8部が全国を制し、かつて34年、蔵本運動部長が掲げた“全勝関学”のスローガンはここに10数年の歳月を経て実現されることとなった。しからばこの偉業はどこにその淵源を求めるべきで

あろうか。

児玉先生のご貢献—————

戦前、報国団鍛錬部長として学生スポーツの終焉^{しゆうえん}を見届けられた児玉国之進先生が戦後、46年から運動総部顧問の役に就かれた。先生は各部復活のための様々な力添えを惜しむことなく果たされたが、何といても最大の貢献は積極的な運動部の推薦入学を推進されたことにある。これに応じて選手たちも精進したが、各部マネージャーの働きは恐るべきものであった。

日々の食糧難、住宅難が大問題であったこの時期、関西、西日本地域の優秀な中等学校スポーツマンが東都に行かず、関学陣営に加入したのである。物質的な窮乏が皮肉にも関学スポーツの興隆に力を籍す形となり、この時入学した精鋭は若い力で各チームをぐいぐい盛り上げてゆき、数年後の運動部黄金時代を築く原動力となってゆく。これが何といても第一の根因であろう。

第二に46年、児玉先生の提唱、推進によって発足した西日本予科大会が直接若い予科運動部員の活動を刺激し、この大会において戦って勝たざることなしという活況は以後“オール・カンセイ”躍進の主動力ともなった。第三に48年度新学制採用とともに新制高校に豊富な人材を集め、その盛り上げる力が前記予科の息吹きと相呼応したことなどが“全勝関学”の発火点として取り挙げられよう。

46年、まず全国君臨の先鞭をつけたのは卓球部であり、日本卓球界不滅の存在といわれる藤井則和の巨像が浮び上る。藤井は46年から49年まで全日本選手権に4連覇、学生選手権も47年から3連覇という無人の境をゆき、大学対抗でも連年東の早大を降して王座を独占した。藤井は戦後初の世界選手権に参加し、複のタイトルを取った。しかし鬼才藤井が卒業を前に替玉受験を行ったことが世論の注目をあび、ついに卓球界から葬られる結果を招いたことは、学生スポーツの観点から多くの示唆を与えるものであった。この卓球部と肩を並べるのは伝統ある相撲部、庭球部の活躍である。

相撲部は46年の全国大会で団体・個人(中村富次)を制したあと、48年から学生角界の双葉山といわれた有光一を擁して黄金時代を築いた。有光は48、50、51年と学生横綱3度(49年は準優勝)という破天荒の偉勲を立て、同期の木村孝とともに48年の国体制覇、50、51年の全国大会優勝の大黒柱となった。また庭球部は48年から50年まで3年連続王座につき、47年は伊藤・戸次組、48年は河本・戸次組が全日本複、49年は戸次、50年は古田がともに全日本選手権を獲得した。サッカー部は48、50、52年と全国を制し、杉本、鴫田、木村らが活躍した。

その他、戦後完全にスターダムにのし上がったものに、ラグビー、ヨット、馬術、ハンドボール、アメリカンフットボールの諸部があった。

ラグビー部は48年、関東の覇者、明大を降して初の全国制覇をとげたが、46年から5

0年まで明大には4勝1敗と圧勝しながら早大には惜敗をつづけた。FW の馬場、船越、TB の北江、八橋らの活躍した時代である。ヨット部は塩路力の指導でめきめき腕をあげ、48、50、51年と王座にすわり、小川、高岡、結城、海徳らの名手が個人選手権をも数回その手中に納めた。馬術部も50年の田村以後、渡辺、守屋、光富、亀頭と名手がつづき、50年から53年まで王座戦4連覇という偉業をとげた。ハンドボール部は49年に日体大を降して以来、54年まで実に全国6連覇という金字塔を樹立し、新興勢力の先頭に立った。闘将渡辺一巳をはじめ白井、檜垣、熊倉、渡辺忠重らがこの大記録を生み出した。同じく新興のアメリカンフットボール部は創設者、井床国夫の献身と松本庄逸の努力で基盤を築き、49、50年と甲子園ボウルの覇を握って全国を制した。渡辺、鳥内、米田、井床弟、花谷らが甲子園をゆるがし、以後につながる黄金時代の先鞭をつけた。

この間、個人的にはレスリングの井川豊、河合信明、水泳では背泳の山本速水、陸上では400^{ヤード}の岡本俊夫、やり投げの堀内哲二、ハンマー投げの椋内重之、ボクシングの納谷誠二が全国に君臨した。納谷は51年全日本フェザー級のタイトルを取ったあと、ハワイ大に留学し、以後全米フェザーのタイトルを2年連取した名選手。そのあと、納谷は同地にとどまってハワイ大教授として東南アジア経済研究の国際的泰斗となり、また州政府要職にも就いた。

OB 倶楽部の芽生え

さて、このころから運動部各 OB 会の連帯のことは関係者の間で考えられ、徐々に推進されていった。結成の目的は勿論 OB 横の連絡を取り相互に親睦を図ること、及び運動部全体の隆盛に寄与することであった。

幸い景気も目に見えてよくなってきた。早速準備会を開き、総会に拡大し、それぞれ現役の活況を肴にして大いに飲もうではないか、というのは当然の成りゆきというべきであった。

1952(昭和27)年5月25日、大阪北のナショナル・ホテルで第1回の準備会が開かれた。集う者、相撲部(堀部伊一郎・21年卒、畠房次・35年卒、木村正春・38年卒、西村平太郎・41年卒)、柔道部(蔵本順吉・35年卒、小溝輝夫・41年卒、村田恒雄・52年卒)、庭球部(清洲安治・37年卒)、拳闘部(宮下雅臣・33年卒、仲田安男・37年卒)、ラグビー部(杉本治・32年卒、高嶋平介・35年卒)、卓球部(磯岡新・34年卒)、ヨット部(村上忠雄・51年卒)、アメリカンフットボール部(米田満・51年卒)の15人。一番古株は相撲の堀部、戦後の OB はヨット・村上、アメリカンフットボール・米田、柔道兼51年度運動部学生本部長の村田の3人であった。この会合では諸般の細部にまで議論が及ばなかったが、何れにしても、この準備会がその後、体育会 OB 倶楽部—KGAA につらなる OB 組織結成の端緒であるのは間違いない。

秋に入って記念すべき第1回総会は10月17日午後6時から大阪梅田、阪急百貨店

特別食堂で開催された(会費300円)。来賓として今田院長、神崎前院長、大石学長始め各学部長がご出席になり、会員の参加は17部55人であった。

このとき決定した事項は①名称を関西学院運動部 OB 倶楽部とする。②会費は各 OB 会ごとに年額1000円とする。③役員は会長・堀部伊一郎(相撲)、副会長・渡辺文吉(陸上競技・大阪)、石本廣一(剣道・神戸)松本敏夫(剣道・東京)とする…などであった。

しかし、スタートした OB 倶楽部はその後、具体的な活動をせず、結局数年間は有名無実の存在となってしまった。規約がなく、周到な組織作りができなかったところに尻すぼみの因があったと思われる。

OB 倶、復活の動き—————

それから数年、年々増加していく OB の間からは強力な OB 倶楽部結成の必要を叫ぶ声が次第に大きくなっていった。現役部員にしても思いは同じであった。56年度の運動総部長、上田高史は各部の中心的な OB と連絡を取り、その年初めから長期にわたって OB 有志の間で慎重な準備期間が持たれた。

機熟して OB 倶楽部復活のための幹事会が開かれたのは56年9月22日(阪急特別食堂)であった。会は各部幹事、約50人が参加し、冒頭満場一致で OB 倶楽部の復活を決議、ついで「倶楽部相互の親睦を第一とし、現役部員の側面的援助、協力にあたる」という根本方針を決めた。そのあと規約作成、総会設営のための準備委員を選出し、仮事務所として(株)三信商会、三戸誠方を指定した。

復活第1回の総会は56年10月25日午後5時から阪急特別食堂で開かれた。OB の参加は96人、学院から加藤院長、池内運動総部顧問のほか、諸先生、各部現役ら約200人が出席して盛大に行われた(会費400円)。席上、準備委員会が用意した規約案を満場一致で承認し、ついで役員として、会長・清水鷹治(21年卒・柔道)、副会長・渡辺文吉(23年卒・陸上競技)、幹事長・沢田修太郎(29年卒・バスケットボール)が選ばれた。

このあと、57年から61年までは総会、幹事会を中心に OB 倶楽部は動いていった。しかし、総会の出席はあまり芳しくなく、最高69人で、平均40人ほど。毎回招待をする先生方、及び学生幹部の方が多いということもあった。

運動総部から体育会へ—————

ここまでの OB 倶楽部の動きとほぼ軌を一にして、運動部現役の間では体育会設立という課題が表面に浮かび上がっていた。戦後10年を経て運動部の質量の拡大は年々顕著であり、こゝろで抜本的な改革にかからないと運動部は行き詰まり状態に陥るという懸念が考えられた。この状況に対して、56年度学生本部長の上田高史がここでもリーダーとなってことを進めていった。

上田は約1年の準備期間を経て、56年6月の学生大会に“体育会の設立”案を呈上した。これは運動部をあげて強引な押し切り作戦に出て成功したが、他の多くの学生の反感を買った後味の悪さが残る。だから運動総部という名称が体育会と変更することは承認されたが、実質的な組織とか予算案など、運動総部の提案した内容にはいずれも待ったがかけられ、そのあとに構成される正式な準備委員会で決定されるという条件がつけられた。

最初の案では正課体育と課外体育のすべてを含めた体育会組織が計画され、それに伴う予算にもかなりの額を考えていたようだが、実際問題としてその内容には時期尚早の感が深かった。

昭和期(その3)

ここで再び各部の戦果に目を転ずると、51年以後、全勝関学のピッチがやや緩慢になり始めた。全国制覇数が4～5と低下したことがそれに当たるが、反面、関西制覇の部はうなぎ昇りにふえ、58年には実に25部の多きを数えた。従来のAクラスの部に伍して広範な運動部の成長が認められることであり、加えて各種目の国際進出が盛んになり、個々に傑出した選手が国際舞台にその活躍の場を見出している。

戦後初めて日本が参加した52年ヘルシンキ五輪には、レスリングの山崎次男とヨットの海徳敬次郎を送り、つづく56年メルボルン五輪にはサッカーに鴫田、長沼、佐藤、平木、北口と関学の現役・OB5人が参加しているし、女子飛び込みの津谷鹿乃子がそのころ、関学入学以前の松陰短大生として出場している。

この時期、庭球部は54、56年に王座につき、ヨット部は西村、寺倉、花崎らが健闘して56、57、59年に全国制覇、馬術部も本野、勝本、佐々の活躍で56年に王座に返り咲いたが、勝本、佐々はその後も長く日本の第一線選手としてのレベルを維持し、64年東京五輪に出場した。アメリカンフットボール部は53年に王座を奪回し、56年には東の日大を33-0と一蹴して全国4連覇をとげて第2期黄金時代のピークを築き上げた。しかも主将の木谷直行は経済学部首席として優等賞を得、卒業式当日には総代としてスポーツマンらしい答辞を述べた。またバレーボール部は地元神戸であった大学選手権で明大、教育大などの強豪をいずれもストレートで退けた会心の勝利。中心となった主将の森下洋一は社会に出て松下電器の社長になり、のち長く衆望を担って学院同窓会長の任に就いた。

そのあと、丁度学院70周年の59年には新グラウンド、体育館、学生会館ができた。ところがこの待望の「器(うつわ)」ができた直後から体育会の停滞、下降のきざしがみえ始めるのだから皮肉なものである。60年の体育会員は1523人を数えてピークに達し、全学生数に対して16%台の形勢。この時期を境にして、実際の数もパーセンテージも減少一途の下降線を描き始める。

戦績面では60、61年まではまだまだ関西第一等のレベルを続けているし、65年ごろ

までは何とか各部により、その努力が払われていた。しかし実質はじりじりと先細りの不安感がすでに露呈されてきたのも事実であった。

それでもローマ五輪が行われた60年は久しぶりに体育会が活況を呈した年である。庭球部をはじめ、サッカー、バレーボール、ハンドボールの球技3部、それにボクシング、拳法の計6者が全国を制したが、これは50年度の8種目、54年度の7種目につぐ快記録である。中でもボクシング部の王座は関西チームとして初の記録であっただけに絶賛を博した。つづく61年は山岳部が現役・OBの精鋭を選んでペルー・アンデスの最高峰に挑む遠征を成功させ、わが国山岳史上に輝かしい一頁を加えた。また硬式、軟式の庭球部とサッカー部が王座を握ったほか、スケート部女子フィギュアが上野純子を中心にして団体・個人(上野)で日本のトップについた。女子団体の日本一は関学スポーツ史上初めてのことである。上野はその後も日本の第一人者として君臨しつづけ、62年3月、スイスのピラルドで開かれたユニバシアード冬季大会に出て堂々金メダルの栄冠を得、日本スケート界の悲願を実現させた。やがて競技生活を終えた上野は結婚して平松姓となり、引きつづき国内外のスケート界で審判、役員として活躍をつづける。98年、長野で行われた冬季五輪の開会式で国際審判として宣誓の大役を担ったのは関西学院スポーツ史上に燦然と輝く金字塔であろう。

この間、63年はOB倶楽部にとって多忙な、しかも成果の多い年であった。まず第一にスポーツセンター建設に伴う募金運動があった。スポーツセンターは池内体育会長の発意で、運動部の宿泊設備というよりはスポーツマンシップ涵養^{かんよう}の場として学院新グラウンドに建てられたもので、9月27日に鍬入れ式、翌64年3月21日に竣工式をあげた。総工費2800万円のうち現役は240万円、OB倶楽部は720万円を各部に割り当て、その全額を完納した。

第二は常任幹事会の結成である。会長を含めて11人のこの会は長くOB倶楽部の執行機関として動いてきたが、その後、66年6月の総会のととき「幹事会を以て総会に代えることができる」という一項を規約に追加したためか、67年以降、総会は1度も持たれず、年1度、または2度の常任幹事会が総会を代行した。そのメンバーは庭球・辰馬龍雄、バスケットボール・沢田修太郎、剣道・松本敏夫、ラグビー・杉本治、サッカー・西邑昌一、スキー・三戸誠、バスケットボール・岩佐道雄、陸上競技・平田重信、フェンシング・三島清春、アメリカンフットボール・米田満、体育会本部・今西好治の11人であった。

第三は監督会の発足である。63年7月に準備会を持ったあと、9月19日に発会式を挙行。66年にはOB倶楽部規約の中に「第六章 監督会」として正式に組みこまれ、体育会部長会議の承認を得たうえで、監督には体育会長から正式の委嘱状が出されることになった。

なお11月11日の会議で初めての監督会役員が互選された。会長・西邑昌一(サッカー)副会長・米田満(アメリカンフットボール)幹事・中村泰男(硬式野球)佐藤勝(ボクシング)大西広太郎(スケート)川口雅弘(軟式庭球)寺島秀雄(柔道部)。

さて、関学に於いて運動部の推薦入試の方針がゆらいできたのは62、63年ごろである。世の中の移り変わり、学院入試体制の転換であろう。「推薦者だからといって入試成績の悪い者を入れるのは断乎反対」とする教授会の大きな声は次第に支配的になっていった。ただ従来の感覚も一部残されていた。過渡的措置として、ある枠内の候補者をひろってゆくという方法がわずかな時期、一部の学部でとられたようである。ところが欲しい選手は大体に於いて成績が良くない。実質的に好素材は関学の門をくぐれなくなった。

しかし、65年ごろまでは何とか各部で現役・OB 一体の努力が払われ、まさかこれほどまでに長期低迷がつづくとは思われていなかったことであろう。63年は庭球部が関西において11年ぶりに敗れた。しかし、ヨット、フェンシング、自動車部女子が全国制覇をしているし、卓球部の川瀬浩が全日本学生の単・複を制する殊勲をたてた。

64年東京五輪では前記、馬術の勝本、佐々のほか、陸上競技の浅井、田中、飛び込みの馬淵鹿乃子、サッカーの長沼監督と平木、継谷、バレーボールの大松博文監督と小山、それにレスリングの井川豊がマネジャーとして出場した。そのひとり、馬淵鹿乃子は日本のスポーツ史上に不朽の名をとどめる女傑であろう。国内では10年余も無敵の強者で、メルボルン・ローマ両五輪に出たあと、飛び込み男子のエース、馬淵良氏と結婚してスポーツ界の話題となった。東京大会で五輪3度目の出場を果たし、2人のかわいい女の子のママさんとなってからも育児のかたわら、全日本チャンピオンとなること数度、72年ミュンヘン五輪には飛び込みコーチとして参加し、五輪4度出場の輝かしい記録を作っている。

昭和期(その4)

この馬淵鹿乃子、そしてスケートの上野純子について女子の大スターが久しぶりに登場した。上野と同じくフィギュアの山下一美がその人である。67年に商学部に入學した山下は68年のユニパシードとグルノーブル冬季五輪、70年世界選手権、72年札幌冬季五輪に出場して引退するまで日本スケート界の女王であった。

団体では60年代後半に入ってからヨット部、拳法部、それに体育会では新鋭の洋弓部(女子)、カヌー部などが全国を制する殊勲を立てているし、個人でも庭球の小浦猛志、中沢俊幸、レスリングの菅沼啓安、ゴルフの入江勉らの第一人者が頑張った。またボート部が朝日レガッタという大舞台で73、76年の2度にわたって優勝している。こうした貴重な好記録が文字通り、ポツリポツリと出てきて僅かに干天の慈雨となることはあったが、全国制覇皆無、従って大学祭覇業交歓のときに那須杯を授与することができないという年が何回かあった。全体としてみると、悲しいかな、寥々たる不振を嘆くのみであった。そうした中であって孤軍奮闘、関学体育会を辛うじて支えてきたのはアメリカンフットボール部の健闘であった。60年代後半から9度の全国制覇。しかも73～77年の5年連続優勝は初めての記録であった。

この時代の決定的な事件は学院紛争であろう。大学という象牙の塔があらゆる角度か

らみつめ直され、体制というものがこっぴどく驚倒されつくした。よく判るようであり、またさっぱり判らないところもあった。鮮烈な印象は大衆団交なるものであり、「バリケードの青春」というイメージであり、それでもなお大多数の学生は無関心派であるという事実であった。

紛争の翌70年から関学は、体育会にとって全く「閉ざされた門」となってしまった。60年代後半以後、乏しい素材ながら、それまでの遺産を食いのばして生きてきた体育会は全く息の根を止められたかのごとく、一つ、また一つと地ベタに叩きつけられていった。

OB 俱幹事長に就任

この紛争のころから私、米田満に対して体育会 OB 倶楽部の幹事長をやるようにという働きかけが始まっていた。40歳を越したばかりの若輩の私はそんな大それた仕事はやりませんとお断りしていた。

要請はその後も折々に続けられ、71年2月、私は覚悟をきめてその重職を受けることにした。まず各運動部の中心的な方に懇請して、幹事を出して頂き、42部84人の幹事会を結成した。また組織の潤滑油となるべき機関誌を発行することを最初から実行に移した。私流の編集にかかる25冊がいま関学スポーツの四半世紀の歴史をとどめて手許にある。

まず私の「決意表明」はつぎの通りである。

「私は本年2月に幹事長に指名されたが、かねがね OB 倶楽部のことについては自分なりに色々考えていた。平時に於ては年1回の総会で親睦を深めることでいいだろう。しかし、いまや体育会が潰れかかっているという非常時である。OB 倶楽部は一致団結して巨象のごとく動き出すべきときだと思う。

私は現役時代から理論派でなく、職人型の叩き上げタイプの選手であった。およそ緻密でない、ソロバンをようはじかない、回転の遅い男だが、フェアプレーの精神とは悪いことをしないことだと単純に信じて疑わないし、自分が私学関西学院の運動部の OB だという自覚はある。そして幹事長という立場に強い責任と猛烈な闘志を覚える。私は当分の間、この仕事に精魂こめてみようと決意している。

すでに5月、6月、7月と3回の幹事会を招集した。出席はいずれもすばらしいもので感謝の極みである。幹事各位はいずれも各部 OB 会の中心的な方ばかりである。この方々とさらに密に触れ合って、ともに事を起こすべき同志としての基礎固めをするのが私の最初の仕事だと思っている。」

つぎに私は「3つのスローガン」という運動方針を練り、会報創刊号(71年6月発行)に発表した。その概略を説明しておく。

「1.推薦の問題について学院当局と話し合おう」

推薦の要望はいうまでもなく OB 俱の最大の関心事である。それだけに息長くやる必要

があり、決してOB 俱が圧力団体になってはならないと初めから強く思っていた。OB 俱会報に毎号適切なキャンペーンを展開していく。読んで楽しい内容を心がけ、OB 俱の支持、意思統一をはかる。先生方との触れ合いを深めるため、会報を相当数の方にお届けした。また会報の中に参加してもらおう方策を考えた。OB 俱の幹事会、総会を毎年充実させてゆき、教授会がOB 俱の願いを受け止めてくれるまで粘り強く運動を継続していくこととした。

「2. 体育会 OB 倶楽部の憩いの場所を作ろう」

「憩いの場所」とはたとえばこんなところだ。そこへいくと関西学院のこと、体育会のことは大抵わかる。いつも関学スポーツのことを肴にして杯を傾けるオールドボーイがたむろしている。OB 俱だけではない。同窓会員全体にも呼びかけて関西学院ムードの横溢した社交の場があれば楽しいではないか。

「3. 総合スポーツセンターの建設を促進しよう」

関西学院のすべての人が利用できる大きな体育館を作ろうという話が出ている。大学、高等部の授業場として、またクラブ活動の練習場として、また一般学生諸君がスポーツを楽しむ場所としての大きなもの。そこは学生、教職員はもとよりOB も使用可能、おまけに大学が改革の一つとして打ち出した「市民への解放」という方向からすると、一般市民、職域の方にも利用して頂く。そんなスポーツセンター作りのことは各方面で話し合われている。OB 俱は声をあげてその実現のために力を尽くそうではないか。

3つのスローガン、動く—————

以上の「3つのスローガン」はその後、どんな風に動いていったのか。

「憩いの場所」は73年11月14日、大阪北新地の西詰めという一等地のビルの地階に「関西学院倶楽部」として発足した。スタートにあたり自分でも思う存分の働きをしたと思っている。それから20年経って、関学倶会報32号(93年2月発行)に私は「関学俱20年の歩み」を書き、その年11月10日、新阪急ホテルで行われた20周年記念祝賀会の際、記念のスピーチをした。それからさらに10年、私は「関西学院倶楽部30周年記念誌」を編集(2004年2月)し、昨13年11月、40周年を迎えた倶楽部は場所を移して健全に運営されている。私の会員番号は50番である。

「関西学院総合体育館」は77年3月25日に竣工した。それまでのスペースを倍増したこの建物は高等部の授業を完全にカバーし、一般学生、教職員にも利用されている。竣工の日、式典を終えた午後4時から体育会のスローガンである「NOBLE STUBBORNNESS」記念碑の除幕式を行う。1920(大正9)年、ときの庭球部長畑歎三先生にお願いしてこのスローガンを作ってもらった当時の部員、朝長正男氏が心をこめてその由来を語った。記念碑の裏面には100字の銘文が刻まれている。この銘は記念碑建設の責任者となった私が書いた。

さて、肝心の「スポーツ推薦の問題」は何らの成果を得られずに延々20年以上の歳

月を費やし、漸く91年に至ってことが動いた。私は91年7月発行のOB 倶楽部21号につきのように書いた。

「平成3年2月8日、関西学院大学評議会の席上、商学部長・石田三郎教授は商学部の『スポーツ推薦入試(案)』を上程、議長の拓殖一雄学長がその質疑を会議に諮ったあと、この案件は何の問題もなく承認された。

私は会議のメンバーの一人としてそこにいた。そしてそのひとときの重みに改めて触れてみると、これが長い間待ち望んだスポーツ推薦の復活であるという事実に思い至って一種名伏すべからざるおののきを覚えたものであった。

それはまさしく昭和44年の紛争以来、24年ぶりの復活である。関学スポーツはこれで久しい停滞にストップをかけ、明るい展望を描く素地はできた一と、すぐさま大喜びで萬々歳を唱えたいのであるが、それは果たしてどうであろうか。このスポーツ推薦が学院活性化の担い手として即効を示すことができるのか、或いはまだ暫く時日を籍さねばならないのか、それは実のところ、何とも計りかねるとしか、言いようがないのである。

しかし、ただ一つ言えることは、たとえ僅かであれ『スポーツ推薦の門が開いた』ということであった」。

「スポーツ推薦」はその後、10数年を経て大学各学部に拡大し、推薦人数も漸増している。これが各運動部の強化に資しているのは勿論のことである。その戦果は尻上がりに顕著であり、近々の10～20年の間、とくに古い伝統チームなどに固定されず、多くの気鋭の運動部に活潑な足跡をとどめているのは括目すべきことである。

総合関関戦始まる—————

さて、体育会OB 倶楽部の活動の中で取り上げるべき大きな一つは総合関関戦の推進であろう。関大、関学はそれぞれに強烈な紛争を体験し、そのあと運動部は停滞して久しかった。両学の体育会OB 幹部は話し合いを始め、次第に多数による懇談会に拡げ、両学理事長、学長など首脳を招いてスポーツ振興を訴えた。77年9月14日、大阪梅田のアサヒ・ビアハウスで開いた両大学OB100人余りの会合で世話人の私は「両学体育会に活を入れるため総合関関戦を提唱する」決議案を上程し、満場の拍手をもって採択された。その提案はやがて両大学当局の積極的なバックアップを得て、翌78年11月29、30日、関大千里山キャンパスでの26種目の対抗でスタートした。閉会式の時、両校の現役、OBは篝火^{かがりび}を焚き肩を組んで互いに校歌、逍遙歌などを歌った。そのときの感激的な情景は忘れられない。

第2回は関学上ヶ原キャンパスに関大軍を迎えた。この年以降、35種目前後という大きな対抗戦となり、時期も6月2週、或いは3週あたりに固定されている。

第20回くらいまでは関大が大きくリードしていたが、以後、関学が巻き返して追いつき、面白い展開になってきた。

それから10年後、2007年の第30回大会は関学上ヶ原キャンパスで挙行する予定

であったが、何たる運命の悪戯か、折から東西の学園で流行し始めた“麻疹”の発生によりその大会は流れた。ここまで通算、関大15勝、関学14勝、1中止という成績である。

そのあと、第31回大会関大勝利のあと、関学の快進撃が始まる。それは関関戦史上初めての6連勝というすさまじいものであった。戦い終わって今年、第37回大会までの通算は20勝16敗1引分と相成った。

これまで延々と相戦ってきて、勝敗の結果、今後の行方もさることながら、この間、現役、OB 相互の親睦交流、友情といったものを改めて痛感する。今後さらにその継続を願っている。

この関関のつながりはさらに関関同立の交流に発展していく。20年ばかり前、私は体育会 OB 倶楽部会報10号(86年6月発行)の企画で関関同立体育会 OB 幹部のご参加を得て座談会をやったが、そのときの好ましい雰囲気惹かれて「年に1回、4私学の交歓をやりましょうか」と話しかけ、それは翌年から実施されて今年2014年には27度目となる。蒔いた種はすくすくと実っていくのを私は心楽しく見守っている。

さて、本項もいよいよ終盤に差しかかってきた。折もよし、関学スポーツは好況のうちに、こんな一日を迎えることができた。それは2015年11月1日、恒例の覇業交歓の場に於ける強烈な思い出である。いうまでもなく覇業交歓は年度最重要なる体育会イベントと位置づけられている。その日、昼の12時半に中央芝生に集結した体育会各員は、晴れがましくその場に列していた。根岸紳体育会長は、これまで類のないほど多数にのぼる表彰者の一人ひとりに心をこめて表彰状を読み上げ、賞杯を手渡していった。それは長時間にわたる労作業であると思われたが、根岸会長の誠実な対応は決してゆるむことがなかった。体育会最古参の庭球部に始まって新鋭のラクロス部に至るまでの計43の運動部の一体感は、みじんの揺るぎもなく、誠に立派なものであった。

このあと、祝辞を述べた体育会同窓倶楽部の渡辺淳一会長は「きょうの覇業交歓はこれまで最大最高のものである。男子、女子、団体、個人、全国制覇、関西制覇、その他、各種の表彰を含めて、その総数は95にのぼる」と声高らかに誇らかに宣言した。体育会総員の勝利のどよめきは中央芝生の隅々まで拡がっていった。

この関学スポーツ快進撃の原動力となったのは、関学体育会と関学体育会同窓倶楽部の密接な協力関係にある。そしてその実相は、2000年秋学期から根岸体育会長が立ち上げた「寄附講座の開設」である。これは体育会に関わる教職員と体育会同窓倶楽部によるスポーツに関わる講座が、オフィシャルな授業として開設されたものであり、講座を終了した学生は単位が取得できる他に例を見ないユニークな取り組みであった。命名の由来は、授業の対価が学院へ寄附されるところに起因している。

この根岸会長の発意を受けとめるべく、渡辺同窓倶楽部会長が全 OB 会に触れを出して大車輪の働きをみせた。各運動部はそれぞれ各スポーツの歴史に触れ、自チームの歴史、伝統を深く振り返って懸命であった。核となった講義担当者はそれぞれ立派に、その職責を果たされたと感謝申し上げたい。